第３章 生命の七十パーセント

SEVENTY PERCENT OF A LIFE

01 — 二つの鼓動の間

ロイ・バッティは、細い白い照明を見上げて目を開いた。激しい痛みも覚醒の衝撃もなかった。ただ、配管の奥で水が流れ、視界には診断メッセージが浮かんでいた。

NIL-11R: INITIALIZATION COMPLETE

ALTERNATIVE COOLANT: STABLE

NEURAL INTERFACE: SYNCHRONIZED

POWER RESERVE: 93%

MAXIMUM MOTOR OUTPUT: 70%

LIFE-SUPPORT REGULATION: STABLE

「どれくらい経った？」

手術台の横に立つレイチェルが答えた。「六時間十七分よ」

「俺は死んでいたのか？」

「いいえ。神経活動は一度もゼロにならなかった」

「それは、俺がその間も存在していたという意味にはならない」

「ええ。ならないわ」

ロイは上半身を起こした。腕は動いたが、以前とは異なる。思考の直後に圧倒的な力が発生する感覚が失われ、意識と動作の間に明確な制御があった。

「七十パーセント」

「通常の動作ではほとんど変わらないわ。違いが出るのは最大負荷のとき」

「誰かに殺されそうになったときか」

レイチェルは答えた。「そうね」

交換で差し迫った制御系統の停止は回避できた。それでも元の生命維持機構が失った時間まで回復したわけではない。

「あとどれくらい生きられる？」

「まだ、根拠のある数字は出せない」

ロイは手を開き、もう一度握った。「正直に話すのが上手くなったな」

「まだ全部ではないけれど」レイチェルは目を伏せた。

02 — ヘリウム問題

レイチェルは二つのユニットの構造を投影した。旧式の NIL-11 には極めて特殊な高純度ヘリウムを使う密閉熱安定化系統が組み込まれていた。強力な神経・筋肉系が瞬間的に発生させる熱を制御するためだ。

「なぜ純正品に戻さなかった？」ロイが尋ねた。

「その仕様に合うヘリウムの供給は政府が管理している。私たちの手元にはないの」

「大臣は俺を生かす方法まで握っていたわけだ」

「少なくとも、その一部を」

代替の NIL-11R は別の作動媒体を使う。神経接続部を維持しつつ熱制御を作り直したが、冷却能力の限界によって最大出力は旧型の七十パーセントに制限される。

「もっと冷やせばいい」

「そうするには身体の設計そのものを変えなければならない」

「一度は造り直されている身体だ」

「一度だけじゃないわ」レイチェルは思わず漏らした。

ロイが顔を上げる。「十一年間の話か？」

「複雑なの」

ロイは長く沈黙した。外部から旧型の消耗を補充できないことも、この修復が永久の寿命を与えないことも理解した。

「なら、残る時間を使うしかない」

「七十パーセントでも、追ってくるほとんどの相手より強いわ」

「ほとんど？」

レイチェルが答えなかったので、ロイは理解した。

「クロノスか」

03 — 知らない身体

全長四十メートルの訓練室には機械腕と衝撃吸収床が並んでいた。最初の金属球を、ロイは容易につかんだ。二つ目も、三つ目も同じだった。

反応時間は正常。通常動作の効率も高い。だが試験装置の速度を上げると、ロイが知っているはずの身体は期待どおりには動かなかった。

機械腕が肩を打つ。ロイは床に倒れた。

「停止して」レイチェルが技師に言った。

ロイは起き上がり、少し笑った。「昨日までの身体を、まだ期待している」

彼は再試験を求めた。同じ速度。今度は機械腕から逃げなかった。進路へ一歩踏み込み、関節に触れ、運動量を横へ流した。続く腕が最初の腕と衝突し、両方とも安全停止した。

    PEAK OUTPUT: 41%

    THERMAL LOAD: LOW

「今の方がいい」

「ずっといいわ」とレイチェル。

以前の身体は速度によって判断の遅れを埋め合わせることができた。新しい身体では、最初の判断を間違えないことの方が重要だった。

ロイは停止した機械を見つめた。力を失ったことで、世界が初めて別の形で見え始めていた。

04 — 大臣の第五資産

政府の無人実験室には五つの原子時計が置かれていた。技術者はすべて再校正したはずだったが、表示時刻は少しずつずれていた。

クロノスは浮遊する銀色の球体へ手を伸ばした。球は動き、次の瞬間、左右の二か所に同時に存在するように見えた。

「不可能です」技術者が後退した。

「いつもそう言うね」

扉が開き、大臣が入った。ほかの人間が退出すると、大臣は問いただした。

「ゴライアスもシェイドもベクターもヌルも失敗した。お前はどうする？」

「まだ試していないよ」

「ロイは弱くなった。今こそ回収しろ」

「必ずしも弱くなったわけじゃない」

大臣は眉を寄せた。「好奇心はお前の役割ではない」

クロノスは球体を見た。「服従も違うよ」

反射像だけが移動し、大臣は思わず後退した。子供はその反応を見逃さない。

「怖いの？」

「違う」

「ロイは死んだことを覚えている。だから、ほかの個体と違うんだ」

クロノスが静かに言ったその意味を、大臣は確かめようとしなかった。

05 — 記録庫の下の記録庫

レイチェルはロイを医療施設のさらに下へ案内した。古い鋼板の壁にタイレル時代の製造記号が残る。通路の先には、無線認証も生体読取装置もない扉があった。

「自分のネットワークを信用していないのか？」

「設計された仕事については信用しているわ」

物理鍵で扉が開く。内部には隔離端末、密閉棚、旧式の記録媒体が並んでいた。

ロイは Memory Stick PRO Duo MAX に目を止めた。小さなラベルには RB / CONTINUITY / 11 とある。

「十一は世代番号か？」

「いいえ。計画の期間」

「俺が存在しなかった十一年間か」

レイチェルはうなずいた。

「読み出せるか？」

「ここでは無理。エイドリアン・タイレルの持つ旧式認証装置が必要なの」

「俺は十一年間、何をしていた？」

「現在のあなたの身体は活動していなかった。でも、あなたの識別情報につながる別の何かが、記録を作り続けていた」

ロイは媒体から目を離さなかった。

「それは俺だったのか？」

「それこそ、私が答えることを恐れていた質問なの」

06 — 始まりより前の名前

ロイは隔離端末を起動した。索引は読めても、本体の大部分は暗号化されたままだ。

> SUBJECT RB — SECONDARY OBSERVER
>
> OBSERVER IDENTITY: C-05

「観測者は誰だ？」

「子供よ」とレイチェルは答えた。

ロイが振り向く。「クロノスか」

「元が何だったのか、私にもわからない。計画の開始時には実験的な観測システムと記録されていた」

雨が止まったように見えた街路。伸びる通路。正常に測れない距離。ロイは子供の声を思い出した。

「C-05 は俺を観測していたのか？」

「その記録がある。少なくとも、現在の大臣が就任するより前から」

「なら、あの大臣が子供を造ったと決まったわけじゃない」

「ええ。そして、彼が本当に支配できているかどうかもわからない」

ロイは隔離端末を見つめた。十一年間の空白は、何も存在しなかった時間ではない。彼の知らない出来事が、他人によって記録されていた時間なのだ。

07 — 記憶することの代償

貯水池を望む観察室で、ロイはレイチェルに問いかけた。

「十一年の間、人格を保存するための実験があった。神経の再構築も、保存された情報を独立して反応させる実験も。そういうことか？」

「ええ」

「いくつあった？」

「正確にはわからない」

「俺が生きていたかどうかも？」

レイチェルは水面へ目を向けた。「あなたが『生きていた』という言葉で何を意味するかによるわ」

「便利な答えだ」

「簡単に答えて間違えるよりいい」

ロイは考えた。誰かが自分の記憶に似たものを使って別の精神を造ったとする。その存在は自分なのか。別の人間なのか。

「お前は答えを知っていると思っていた」

「いいえ」

「クロノスは？」

「十一年間にわたる記録に、その番号が出てくる。でも空間異常の仕組みは断定できないわ」

ロイは貯水池へ目を向けた。

「俺が誰かを決める答えはまだないらしいな」

「ええ」

「だが、次に何をするか決めるのは俺だ」

08 — 訪問者

圧力センサーが異常を示した。誰かが下層水路を通過したように見えたが、監視映像には何も映らない。重さの反応は突然消え、隔壁の反対側へ現れた。

「クロノス」とレイチェルは囁いた。

照明が明滅し、ガラスに小さな人影が映った。ロイは振り返ったが誰もいない。反射像だけが残っていた。

「変わったね、ロイ」

「よく言われる」

「七十パーセント。レイチェルがあなたを小さくした」

「生かしてくれた」

「同じことかな？」

ロイは反射像を見た。「何が目的だ？」

「覚えているか確かめたい」

「何を？」

「僕のこと」

その瞬間、ロイの視界に白い部屋が現れた。閉じた扉。その向こうに立つ子供の影。覚醒時に見たものと同じ光景だった。

「僕のこと、覚えている？」

ロイが後退すると、像は消えた。計器も正常へ戻った。

レイチェルが近づく。「何があったの？」

「以前、あの子供に会ったことがある気がする」

それが本当の記憶なのか、誰かの残した痕跡なのか、彼には判別できなかった。

09 — 命令なき選択

移動司令室でベクターはクロノスを待ち受けた。

「どこへ行っていた？」

「観察」

「大臣の命令に従っていないな」

「あなたもね」

ベクターの表情が変わった。

「ろ過室を破壊できたはずだよ」クロノスが続けた。「改訂命令はそれを許していた。でも、あなたは撃たなかった」

「必要な部品の損傷を評価した」

「ためらったんだね」

ベクターは否定できなかった。

「なぜバッティを回収しない？」

「ほかにも彼の記憶が戻るのを待っている人がいるから」

「誰だ？」

「まだわからない」

「なら、どうして……」

「あなたは命令を使って、大臣が正しいかどうか考えずに済むようにしている」

子供の声は穏やかだった。ベクターは言い返せなかった。

クロノスは小さな椅子へ戻った。彼自身も、自分が何を待っているのか、まだ完全には理解していなかった。

10 — 七十パーセントの限界

ロイは再び訓練室へ戻った。四本の機械腕が異なる角度から接近する。彼は最大出力で逃げようとはせず、先に来る腕の運動を次の腕へ誘導した。

PEAK OUTPUT: 37%

THERMAL LOAD: LOW

難度を上げる。一度は命中したが、倒れなかった。誤った判断を検出し、次の動作を減らす。

PEAK OUTPUT: 49%

THERMAL LOAD: ACCEPTABLE

以前の身体をまねる必要はない。失った三十パーセントは戻らない。しかし判断の仕方は変えられる。

レイチェルが入室した。「調子はどう？」

「弱くなった」

彼女が残念そうな顔をすると、ロイは付け加えた。

「だが、前より興味がある。失った力を使わずに何ができるのか」

「クロノスは戻ってくるわ」

「知っている」

「大臣も諦めない」

「それも知っている」

ロイは観察窓へ向かった。「すべて終わったら、十一年間の記録を見せてくれ」

「知っている自分が変わってしまうかもしれない」

「もう変わっている」

照明が一瞬明滅した。観察窓に白い部屋が映り、閉じた扉のそばに子供が立っていた。次の瞬間、像は消えていた。

ロイはガラスを見つめた。クロノスは彼を単に追っているのではない。待っている。十一年間、ずっと待っていたのかもしれない。

第3章「生命の七十パーセント」— 完